

膜シンポジウム2025は、2025年11月27日（木）および28日（金）の2日間にわたり、関西大学100周年記念会館にて開催されました。膜シンポジウムは、今回で第37回を数える、日本膜学会を代表する研究集会です。本シンポジウムの実行委員長を務めさせていただいた立場から、開催のご報告を申し上げます。

本シンポジウムの開催にあたっては、同時期に炭素材料学会年会（11月26日～28日）およびゼオライト研究発表会（11月27日・28日）が開催される日程となっており、関連分野の研究集会が重なることで参加者数への影響が生じるのではないかと懸念がありました。しかしながら、そのような懸念をよそに、口頭発表36件、ポスター発表90件と非常に多くの演題をご応募いただき、参加者数は214名に達しました。これは、膜シンポジウムとして過去最多の参加者数であり、膜研究に対する関心の高さと、本シンポジウムが果たしてきた役割の大きさを改めて実感する結果となりました。

膜シンポジウム2025の主題は、“膜を究める”としました。人工膜・生体膜・境界領域という日本膜学会の特徴的な三領域において、膜の構造、機能、設計、評価、プロセス、応用に至るまで、膜そのものを多角的かつ本質的に捉え直し、領域の枠を越えた深い議論を行うことで、“膜学”をさらに発展させることを目的としました。本会の理念である異分野融合を改めて意識したプログラム編成とすることで、基礎から応用まで幅広い研究成果が発表される場となりました。

口頭発表は単一会場で実施し、人工膜・生体膜・境界領域の発表を4件1セッションとして編成しました。各セッションは可能な限り領域内で構成しつつも、計9セッションを分野別にまとめることなく配置することで、会期を通じて三領域の発表が入り交じる構成としました。こうした構成は、分野の枠を超えた議論が生まれることを期待して行った試みです。また、各演題につき発表15分、質疑応答5分の時間配分としました。これは、発表内容を十分に理解したうえで、背景や本質に踏み込んだ議論を行っていただきたいという意図によるものです。その結果、各発表において活発で密度の高い質疑応答が行われ、分野を越えた視点からの質問やコメントも多く見られました。ポスター発表会場においても、終始活発な議論が交わされ、発表者と参加者との間で熱心な意見交換が行われました。特に学生発表者にとっては、多様な分野の研究者から直接質問や助言を受ける貴重な機会となったものと思われまふ。学生賞の審査においても、審査員との間で活発なやり取りが行われ、会場は大いに賑わいました。

1日目のプログラム終了後には、会場と同じ関西大学100周年記念会館にて懇親会を開催し、60名の方にご参加いただきました。懇親会では、実行副委員長の須丸公雄先生

（産業技術総合研究所）に司会を務めていただき、日本膜学会会長の山口猛央先生（東京科学大学）よりご挨拶を賜った後、名誉会員の高木良助先生（神戸大学）のご発声による乾杯のもと、和やかな雰囲気の中で交流が始まりました。会場では、分野や世代を越えた活発な意見交換が随所で見られ、本シンポジウムの理念である異分野融合を体現する場となりました。懇親会の席上では、赤松憲樹先生（工学院大学）より日本膜学会第48年会（2026年6月1日・2日、東京たま未来メッセ）、須丸先生より膜シンポジウム2026（2026年11月19日・20日、産総研つくば中央）の開催に関する案内があり、今後の学会行事に関する情報が参加者間で共有されました。懇親会の中では恒例の三賞（参加登録・演題登録・要旨提出が早かったで賞）の発表も行いました。副賞としては、「人と人をつなぐバトン」という意味が込められたバトンドールと、「幸せ（ハッピー）が巡り、戻ってくる」という願いが込められたハッピーターンを用意しました。研究分野や世代、立場を越えた交流が今後も連鎖し、本シンポジウムを起点として新たなつながりや研究の発展が生まれることを期待し、想いを込めて選定したものです。

さらに、会期中には6社による企業展示が行われました。膜材料、評価装置、関連技術に関する最新の製品・情報が紹介され、研究者と企業との間で意見交換が行われるなど、学術と産業をつなぐ貴重な交流の場となりました。企業展示は、研究成果の社会実装や今後の研究展開を考えるうえでも有意義な機会であったと感じています。

本シンポジウムの開催にあたり、実行委員の皆様には多大なるご尽力を賜りました。また、関西大学の学生の皆様には、受付や会場運営など多方面にわたりご協力いただきました。さらに、日本膜学会事務局をはじめ、ご支援・ご協力を賜りましたすべての関係者の方々に、実行委員長として心より感謝申し上げます。本シンポジウムにおいて交



講演会場の様子

わされた数多くの議論と新たな交流が、今後の膜研究のさらなる深化と発展につながり、次回の年会ならびに膜シンポジウムへと継承されていくことを期待しています。

**日本膜学会会長：**山口猛央（東京科学大学）

**実行委員長：**田中俊輔（関西大学）

**実行副委員長：**須丸公雄（産業技術総合研究所）

**実行委員：**赤松憲樹（工学院大学）、池田義人（滋賀医科大学）、太田誠一（東京大学）、大橋秀伯（東京

農工大学）、岡本泰直（神戸大学）、岡本行広（大阪大学）、佐伯大輔（信州大学）、菅 恵嗣（東北大学）、瀬下雅博（地球環境産業技術研究機構）、中尾裕之（富山大学）、長尾耕治郎（京都薬科大学）、中川敬三（神戸大学）、長澤寛規（広島大学）、中瀬生彦（大阪公立大学）、南雲亮（名古屋工業大学）、樋口雄斗（関西大学）、廣田雄一朗（名古屋工業大学）、松岡 淳（神戸大学）、森田真也（滋賀医科大学）